

浅利演出、それは「文学」の躍動

増満 圭子

『ユタとふしぎな仲間たち』は、芥川賞作家・三浦哲郎が児童向けに書き下ろした小品です。舞台の話をする前に、まずは原作について少し触れてみたいと思います。

原作の冒頭は、次のような一文で始まります。

いなかの春風のなかには眠り葉がまじっている。／眠い。じつに、眠い。眠くて眠くてたまらない。

この部分、皆さんはどんなふうに感じるでしょうか。柔らかでふわりとした春風は、とても心地いいのに、東京からやってきた勇太は、あまり良く思っていないのですね。それは、次のような所からもわかります。

この湯ノ花村は、その名のとおり湯の花のおう村である。
(略) いまはもう、馴れてしまって、なんともないが、初めはこんないやなおいのする村で暮らすのかと思って、うんざり

したものだ。／うんざりしたといえば、初めて村の分教場をみたときも、これから毎日こんなところへ通うのかと、正直いって、うんざりした。なんてちっけな学校だろう！

もうお分かりかと思いますが、小説の中で勇太は、引越してきたこの村に、あまりいい感情を持てなかったのですね。だから、「うんざり」を何度も何度も心の中で繰り返しています。「東京」からやむなく「田舎」に転校させられたことに「うんざり」、村の学校や子ども達にも「うんざり」……。そう、原作での勇太は、はじめは、「都会育ち」を鼻にかけて意固地になり、周囲に「心を開こうとしない子ども」だったのです。

けれども浅利慶太氏のアプローチは少々違います。幕開け直後に登場するユタは、ちょっと気弱で臆病気味で、村の子ども達から「ぼくちゃん、おなごみでな服きて、鉄棒も出来ねんで、ヒョーロヒョーロしてで」と、都会から来た「よそ者」としていじめられているのです。

もちろん、私はこの違いについて、ああだこうだ言うつもりはありません。ただ、ああ浅利さんはそんなふうに演出しているんだな、と思うばかりなのですが、実はこのあたりの違いは、作品の大きなテーマである「友だちはいいもんだ」につながっていく、重要な配慮だと思うのです。そのままの設定であると、後の、座敷わらしたちとの出会い・交流から、生きることのすばらしさ、大切さを知って成長していくユタの姿を描き出すのに、少し焦点がぼやけ

てしまうように思います。ですから「もやしっ子」で気弱なユタであるほうが、テーマが明確になり、より強いメッセージとして、観ている私たちにも伝わってくるのです。

舞台化された作品を観るとき、こんなふうに、原作と読み比べながら楽しむのもその味わい方のひとつです。

ところで、この舞台には、静かで厳かな、東北特有の空気感が漂っています。たとえば、第1幕の中ほど、寅吉じいさんに「満月の夜に座敷わらしが出る」と聞いたユタが、勇気を出して銀林荘で一人眠ろうとする場面での、真夜中の静けさです。ここでは重々しいほどの時計の音が、とても印象的です。観客である私たちも、ユタのドキドキした不安な気持ちを一緒に感じて、惹きこまれてしまいます。

やがて座敷わらしたちが登場、初めての「ご挨拶」を始めます。原作では次のように描かれています。

満月の夜だというのに、天は深いすみれ色に澄み渡っていて、(略)どこからくるともないふしぎな明るさが、座敷わらしたちの群像をくつきりと浮かび上がらせている。

本公演の舞台には、この「すみれ色に澄み渡っている」「どこからくるともない不思議な明るさ」が、何とも言えない美しい光として再現されています。

これこそが舞台芸術の醍醐味です。「文学」は、文字で表された

芸術です。けれども、その作品を、「読む」という行為だけでは決して感じ取ることの出来ない「生の躍動」が、浅利氏が演出する舞台では、音や色、役者さんたちの声や動き、時には小さな息遣いなどを駆使して、とても鮮やかに表現されているのです。

また、『ユタ』には、悲しい歴史が描かれています。

たとえば、わらしたちのセリフに表されている「生まれた年が死んだ年」の重みです。生きたくても生きられなかった「命」が確かに存在したことを、しっかりと私たち今の世代に伝えようとしてくれています。ITの発達で簡単に世界と繋がれ、スマホ一つで何でもできてしまう、便利な世の中に生きる私たちは、ともすれば、日々の忙しさに紛れ、そんな悲しい歴史の上に、今の自分たちの「命」「生活」があることを、すっかり忘れてしまいがちです。自分たちの父・母の時代、その上の世代の人たちが生きた時代はいつたいどんな世の中だったのか、この舞台を観た後で、誰かと話してみるのがいいかもしれません。

同様に浅利慶太氏の戦争3部作なども、大変貴重でそして重要な作品です。ぜひ今後とも絶やすことなく、後世へと伝えていってほしいと切に願います。

文字として表された「文学」を躍動させる場、それこそが、浅利氏が目指した演劇の大きな魅力ともいえましよう。

(ますみつ・けいこ 東洋学園大学人間科学部教授 文学博士)